【支部活動報告】

元気を貰った「小林旭オンステージ」

関東支部　大久保　雅　弘

平成23年3月11日の歴史的震災は筑西市（旧下館市）にも多大の被害をもたらしました。

ライフラインが止まり戦後の物不足な生活を思い出すと共に今日の生活姿勢に改めて反省させられた日々でもありました。

ＪＲ水戸線は1カ月間不通、国道50号線は全面通行止め、周囲の家々の屋根は青いビニールシートで覆われ、塀は崩れ落ち、あちこちに瓦礫の山が積み重ねられた情景は昔を思い出す昨今です。

併せて目に見えない放射能汚染と余震に怯えながら関東支部の年間行事計画である「桜田門外の変」のステージ見学は中止、次いで故秋保武氏の突然の訃報など一連の不幸が重なりました。

そんな自制ムードを吹き飛ばすべく「小林旭オンステージショウ」を観劇しました。昭和13年生、73歳の彼は怒涛の人生を乗り越え、現役の活躍振りは同世代の我々に何らかの勇気と元気な力を得るべく、また、青春時代の思い出にと当時の若者（倉持、箱山、竹沢、村上、大久保清、久家、尾上、馬場、大久保雅）の九人は客席の人となりました。

昭和30年前半、戦後の驚異的な復興を遂げた日本に映画は国民の最大の娯楽として浸透し「東映」は中村錦之介の時代劇、「日活」は石原裕次郎の都会派、小林旭の田舎派路線で大衆を虜にしました。

町から田舎に流れついた若者が悪を懲らしめまた何処かへ流れ去る「渡り鳥シリーズ」のヒロインとして映画の全盛期をひた走り、その主題歌、挿入歌を歌う銀幕のスター「ギターを持った渡り鳥」「ダイナマイトが百五十屯」「さすらい」「惜別の歌」など数々の大ヒット曲で一世を風靡しました。

その後、製作方針の相違から日活を退社、数々の映画会社、プロダクションを設立するも不振、好きなゴルフで安定した生活を得ようとゴルフ場を経営するがバブル崩壊で15億、不動産業で60億の負債、そして離婚、その日の食事にも事欠く日々にデパートの入り口でミカン箱を台にして歌った「昔の名前で出ています」がカラオケブームの先駆けとなりダブルミリオンヒット、「北へ」「もう一度一から出なおします」その後ネオン演歌と言われた「ついてくるかい」「ごめんね」「純子」など一連のヒット曲で夜の巷を席捲し、近年では「熱き心に」と続き１５０曲のヒットを排出し役者としてまた歌手として現役で活躍しています。

今回の舞台では1人で語りと歌で2時間のワンマンショウ“年を重ねると見えない物が見えてくる”と語るナレーションには時の流れとファイトで頑張る“マイトガイ旭”の姿に参加者一同大きな元気を貰った1日でした。